

たたかう労働組合・回転寿司ユニオンに総結集して、労使関係正常化闘争を完遂しよう！

労使関係の正常化をめざして

12

2026/3/4

編集・発行：回転寿司ユニオン

はなまる（根室花まる）でゼンセンの第二組合が結成 回転寿司ユニオンには拒否した便宜供与を、なぜか第二組合には即決

はなまる（根室花まる）に、「UAゼンセンはなまる労働組合」なる第二組合が結成された。名前通り、上部組織は「UAゼンセン」である。さっそく正社員を使って就業時間中にパート・アルバイトをオルグしているようだ。サンプラザ事件（大阪地判令元・10・30、ユニオンショップ協定の悪用）や近畿ハイウェイサービス事件（奈労委平17・3・24）など、会社とゼンセンが一体となってたたかう第一組合をつぶそうと画策した事件は枚挙に暇がなく、最大限の警戒が必要だ。

この組合が原義通りの第二組合（たたかう第一組合対策として、会社が養殖した組合のこと。旧「同盟」系の組合はほとんどがもともと第二組合である）であることを示唆する証拠はさまざまある。

たとえば、従業員に配布されている冊子に掲載されている三浦心一中央執行委員長長の「中央執行委員長挨拶」では、「去る2025年12月22日に本労働組合を結成し、藤谷社長に組合結成の通知書を提出し受理いただきましたことをご報告いたします」と述べられているが、労働組合というのは、使用者から独立して労働者が主体となって結成する組織である。しかし三浦氏は、結成の通知書を「受理いただきました」と表現している。本来手続きとしては、「組合結成の通知書を提出」するだけで十分だ。「受理いただきました」ということは、受理されなかったら組合結成は立消えになるのだろうか。意味不明である。

続けて三浦氏は「労働組合に対しては、ストライキなど対立的なイメージをお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、私たちがめざす労働組合は、（中略）会社と合理的に利益を分配できる『労使協力』の関係を築き」などと述べている。「労使協力」という言葉は「ゼンショー労連」本坊会長も愛用する言葉であり、ゼンセンが「ZEAN」を批判してみても、結局は同じ穴の貉だということだ。同じ穴の貉といえば、正社員偏重だという点もだ。第二組合の組織構成をみても、三浦氏のほか、中央執行副委員長の遠藤氏（開発部）、中央執行書記長の湯坐氏（商品部）と、現場ではたらくパート・アルバイトのなかまはみられない。

さらに驚くべきは、同冊子において「組合費は、毎月の給与から天引きされ」としていることだ。これはチェックオフ協定に基づくものだが、回転寿司ユニオンが先に要求した際には、「必要性も認められません」として拒否していたのである。なぜ回転寿司ユニオンには拒否した便宜供与を、まだ一度も団交していない第二組合には即決して与えているのだろうか。はま寿司で行なわれている中立保持義務違反よりもさらにひどい不当労働行為である。会社への猶予や待ったなしで、労働委員会への救済申立てを行なう。

かっぱ、元気、京樽のゼンセン職場に回転寿司ユニオン組織を建設し正常化闘争完遂を！

これまで回転寿司ユニオンでは、無用な労「労」対立を避けるために、ゼンセンが第一組合として君臨しているかっぱ寿司、元気寿司、京樽などには積極的にオルグをかけることはしないでいた。ところが、はなまるでこのような事態が惹起された以上、私たちもかっぱ寿司、元気寿司、京樽などの職場で会社とゼンセンに痛めつけられているなかまによびかけて積極的に回転寿司ユニオンの組織の根を張り、正常化闘争をこれらの職場で大々的に展開していく決意である。

回転寿司産業ではたらくすべてのなかまのみなさん！とくにゼンセン職場のみなさん！ゼンセンと訣別し、回転寿司ユニオンに総結集しよう！そして労使関係正常化闘争を完遂し、回転寿司産業をはたらく私たちが主役の産業に創りかえよう！